

〔論文〕

睡虎地秦墓竹簡釈文註解(一)

高橋 庸一郎

序

一九七五年十二月、湖北省雲夢県城の西の関門西部、睡虎地の墓地で、秦始皇三十年に埋葬された墳墓一基——睡虎地十一号秦墓と呼ばれる——が発掘された。これは同時に発掘調査整理された睡虎地の十二基の秦墓のうちの一基で、他の十一基の墓と同様、孝感地区第二期亦工亦農文物考古訓練班、孝感地区文化局、雲夢県文化局、県文化館、県宣教戦線、湖北省博物館等の手によって発掘調査が行われたのである。この墓は已に一九七四年に発掘が始っていた所の、後に秦兵馬俑としてその名を世界にとどろかせた秦始皇陵第一、二、三号兵馬俑抗ほど大規模では勿論なかったし、兵馬俑抗に於るその精緻にして雄大な造型と、圧倒的な数量によって、世界の人々の瞳目をほしきままにするような発掘物が、出土した訳ではなかったために、兵馬俑発掘の世界的なセンセーショナル性の陰に隠れて、当時は些か色褪せて見えたりもしない。しかし単に考古学

睡虎地秦墓竹簡釈文註解(一)

的な立場からだけでなく、古代文化史、とりわけ文化遺物の少ないとされて来た秦文化の史的探究という点からみると、この睡虎地秦墓の発掘は、兵馬俑抗に勝るとも決して劣ることのない空前の歴史的価値を有していたのである。その理由はこの睡虎地秦墓からは、千百余枚にのぼる竹簡が出土し、その大部分は始皇帝が中国最初の統一国家を統治していく為に強力に押し進めたと思われる政策基盤としての徹底した法治政治の為の法律文書であったからであり、更にまた、その竹簡の保存状態が極めて良好であり、ほぼ全体に亘ってその解説が可能な状態であった為であった。

この詳しい発掘状況が《文物》一九七六年第六期に、「湖北雲夢睡虎地十一号秦墓発掘簡報」として掲載されている。いまこの、孝感地区第二期亦工亦農文物考古訓練班（もっともこの組織は極めて臨時的なものであったらしく、一九七六年九月に文物出版社から刊行された、線装本の帙入り「睡虎地秦墓竹簡」は、睡虎地秦墓竹簡整理小組によるものであった）による「簡報」を参考として要約しながらその概要を解説し、「釈文註解」への序としておきたい。

## 一、睡虎地秦墓の位置

睡虎地は雲夢県にあるという。雲夢は先秦期には楚国に属していた所である。先秦から秦漢に到るまでは、長江の本流と、その支流の一つである漢水及び清発水とに囲まれた広大な湿地であったようである。宋玉によって楚の襄王と雲夢の台に遊んだ時を設定して作られた《高唐賦》に、李善は、「雲夢楚藪也、在南郡華容縣。」と注している。これは《周禮》の鄭注と同じである。この賦では雲夢の一部である高唐台、そして巫山へと連なる大自然の偉容が、厳選された美辞麗句をつらねて描かれている。尤も今、巫山は蜀の地、四川省に属し、湖北省の雲夢からは四百キロは離れていようから、雲夢の地から巫山・高唐台を見るところのは些か文学性にのっとってのみ理解されうる表現であろう。また司馬相如の《子虛賦》には、「臣聞楚有七澤、嘗見其一、未觀其餘也。臣之所見蓋特其小小者耳。名曰雲夢、雲夢者方九百里」とある。そして相如は、その雲夢の大沢を縦横に駆けめぐり狩をする楚王の勇壮な姿を極めて躍動的に描いている。藪は《説文》に、「大澤也」とし、更に続けて、「九州之藪、揚州具區、荊州雲夢、豫州甫田、青州孟諸、兗州大野、雒州弦圃、冀州楊紆、并川昭餘祁是也。」とあり、雲夢の地が当時から有名な九大渥源の一つであったことが解る。更にこの地一帯が漢代には以上の如く、古来からの伝説とロマンに満ちた景勝の地でもあったとされている所から考えると、秦代に於てもやはり已に同様の評

価が下されていたのではないかと考えられる。楚の都、郢、江陵からそう遠くないこの一帯は、秦からみても政治的には決してないがしろには出来ない可成り重要な地ではあったはずである。

亦工亦農訓練班の発掘簡報では、睡虎地が雲夢地区のどのあたりに位置するのか明かでない。また地図出版社一九七四年《中華人民共和國分省地圖集》を見ても睡虎地という地名は見あたらない。しかし簡報に、「它(十一号墓)的北面与九号、十号墓紧邻并列、東南距云梦火本站約一百余米」とあるから、雲夢駅から北西百メートルぐらいの所であるらしい。ことは雲夢の大沢の東北の限に当り、鄭注や李善注の雲夢は南部の華陽であるから、それは雲夢大沢の西北の限であり、雲夢は古代からとてつもなく大きな沢であったことが知れる。

## 二、墓葬形態

この墓は長方形の堅穴式の土抗墓で、墓道はない、墓の口は東西四・一六メートル南北の中は三米、地表土から〇・三米で、墓の口から墓の底までは五・一米である。墓抗の東部に一つの両開きの板戸をつけた壁空があり、そこに傘蓋をつけたもの見車一つと、その車を輓く三匹の色彩をほどこされた木の足の泥馬と二つの彩色された泥俑があった。そして木槨の蓋板の上に完全な牛の頭骨があった。これは埋葬時に行われた祭祀と関係があるものであろう。槨室は東西の長さ三・五二米、南地の中が一・七二米、槨板の下から槨

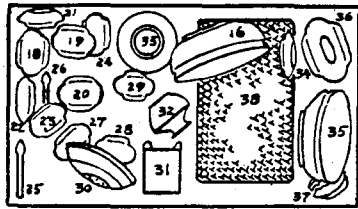
板の上までの高さは一・一六米で槨室の蓋は底を平に削った丸木を横に十枚並べてあった。槨室は横板によって頭箱を槨室の二つの部分に分けられていて、両者は上面を約十四センチの板で厳密に封閉されていたが、また横板の下には両開きの戸が設けられており頭箱と槨室は通じあっていた。槨室には水が七十八センチ程たまっていたがドロはなかった。頭箱は槨室の西部にあり、長さ一米、巾〇・五六米がある。槨室は槨室の東部で、長さ二・二六米、巾一米で一つの木棺が置かれていた。木棺は長方形の箱型で、長さ二米、巾〇・七四米、高さ〇・七二米であった。棺の蓋の両端に近い所にはそれぞれ八重にまきつけられたと思われる麻縄の痕跡が見い出され、棺の側面は、白絹と錦でつまれた草の束があつて棺を保護するようにになっていた。棺の蓋板は厳重には封ぜられてはおらず、槨室内の水が棺内に侵入していた。棺の底板の上には約一センチ米の厚さに粟粒がしかれていた。発掘整理したとき、棺内の遺体は已に朽ち、ただ骨格だけが残っていた。ただすでに萎縮はしていたが、脳髓だけがまだ残存していた。関係部門の鑑定によると、この遺体は男性で、約四十才あまりで仰向けで、肢を曲げてほうむられていた。

副葬品は主に頭箱と棺内に置かれていた。頭箱には、漆、竹、銅、陶などによる随葬器物が置かれ、棺内には千百枚以上の竹簡、毛筆、玉器、漆器などが置かれていた。その他墓坑の東の端の壁に作られた横穴と、槨蓋の板の上にも少し器物があった。

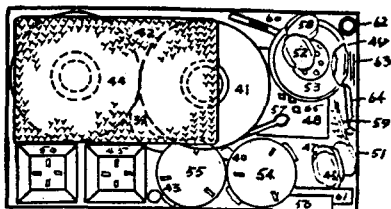
睡虎地秦墓竹簡釈文註解(一)

三、竹簡

棺内に原蔵されていた竹簡は全部で千五百五十五枚（他に残片が八十片）、それ等は八組に分けられており、棺内の遺骨の頭部、右側、



第二層



第三層

墓葬頭箱器物出上位置図

- 2、7、9、11、18—24、27—29、34、36、37、46、47、49、51、52、58 漆耳杯  
1、4 漆圓盒 3 漆奩 6 漆奩 8、陶罐 41、44 小口陶釜 10漆卮 21  
銅匣 13 漆筒 14 木蓋 15 銅劍 16、35 漆盂 25、26 漆匕 30 陶甗 31  
漆樽 32、小陶罐 33 小陶壺 38、42 竹筍 39 銅鑿 40、43、56、 61 竹筒  
45、50 銅紡 48 六博盤 53 鉄釜 54、55 銅鼎 57 銅勺 59 殘竹扇  
60 筆 62 角环 63 六博棍 64 銅削刀 65 六博棋子



竹簡出土位置図

足部、腹部等の場所にある秩序を以って置かれていた。少数のたまたま浮いて動き散乱したものと、足の部分に置かれていたものが破損が比較的多いという以外は、大部分の竹簡の保存状態は極めて良好であった。竹簡の大体は長さ二三・一―二七・八センチ米、巾〇・五―〇・八センチ米であり、墨で秦隸書体で書かれていた。そしてそれらの文字はほとんどすべてが極めてはっきりとしており判読は充分可能である。竹簡の上に残された縄目のあとから、竹簡は上中下の三段に亘って細い縄でその順序に随って編まれて、冊をなしていたものと思われる、整理に当った時にはこうした細い絶は已に朽ちて、その順序は多く乱れていた。

竹簡の内容は次の如くである。

- 一、《編年記》
- 二、《語書》
- 三、《秦律十八種》
- 四、《效律》
- 五、《秦律雜抄》

六、《法律答問》

七、《封診式》

八、《爲吏之道》

九、《日書》 甲種

十、《日書》 乙種

これ等のうち、《語書》、《效律》、《封診式》、《日書》 乙種の四種は竹簡上に題名が書かれていたものである。その他は、一九七七年に、睡虎地秦墓竹簡整理小組が擬定したものである。

四、隨葬器物

この墳墓は大量の竹簡の他に七十余件の器物が副葬されていた。そしてその殆んど大部分のものが保存状態がきわめて良好であった。主なものは漆、木、竹、銅、鉄、陶と玉石等の類であり、漆器が最も多い。

(一) 筆記工具

1 筆三本(ケース付き)

2 銅刀一件

(二) 漆器 四十件近い、だが一つの漆圓奩(化粧道具を入れる小箱)だけが棺内に置かれていた。その他は、頭箱に置かれていた。そのうち耳杯は二十三件、奩三件、盃、卮、盒、匕各々二件、筥、六博棋盤(将棋の一種)が各々一件、あるものは器の上に烙印と針刻文字があった。文字と符号には二種類

あり、一種は針刻のもので「士五軍」「陰里□」「張二」「𠂔」  
「𠂔」などがあり、他のもう一種は「□亭」「包」「□□亭上」  
などの烙印である。

1 孟は二件で、外底にそれぞれ「亭」の烙印や、針刻された  
「𠂔」や「𠂔」などの文字符号が見られる。

2 圓盒二件、両者ともその外底に「亭」「□」の烙印文字が  
二ヶ所あり、下腹に近い底に「包」の烙印が一ヶ所、更に一  
つの蓋の上に「陰里□」の針刻文字がある。

樽一件、これもやはり外底部に烙印文字がある。

3 卮一件(さかづき)

4 耳杯二十三件、うち最大の二件の外底とともに「亭上」等  
の烙印があり、また針刻文字のあるものもある。他に七件の  
小耳杯の外底には「□亭」の烙印、「士五軍」の針刻文字、  
及び「𠂔」の針刻符号がみえる。

5 彩絵圓奩一件、出土した時中に銅鏡、木の梳がそれぞれ一  
件あった。

6 六博棋一組、棋盤の上面には六博棋の紋が刻されていた。  
また六本の算籌、十二箇の六種棋子も同時に出土した。

(三) 陶器六件 それぞれ器の上にはすべて「安陸市亭」の方形の  
印がおしてあった。

1 小口瓮二件、ともに肩の部分に「安陸市亭」の印がおして  
ある。

2 小壺一件、肩の上部に「安陸市亭」の印が一箇所。

睡虎地秦墓竹簡釈文註解(一)



小口陶瓮  
上の印文

(以上図はすべて  
《文物》1976年  
第6期からと  
つた)

3 甑一件、底部にやはり「安陸市亭」の印が一箇所。

四 銅器十件、主なものは鼎、鈇、鑿、匱、勺、劍、削力などで  
あるが、文字、符号などのあるものは一切ない。

1 鼎二件、

2 鈇二件、

3 鑿一件、

4 鏡一件、

(五) その他 鉄釜、竹筥、竹筒、竹同、竹扇、竹筴、竹管、竹  
筒、瑪瑙環、角環、骨管、麻鞋、糸網盒、それに牛、豚、鶏の  
遺骸に棗、桃のたねなどがあった。

## 編年記

竹簡は全部で五十三枚からなり、墓主の頭骨の下から発見され  
た。その出土状況からみて、この五十三枚で本来一巻を成していた  
ものと思われる。前に記したように、竹簡は一枚約〇・五ミリ〜〇  
・八ミリの巾であるから、その全体の長さは二七センチ〜四三セン  
チ以上あり、巻を成した時に竹簡と竹簡との間がどれ程のものであ

ったか今解らないが、ほぼ竹簡の巾と同じものと計算すれば、一巻の長さは約五四センチと八六センチということになる。巻を解いたときに余りに長いと取扱いに不便であつたろうから、当時の竹簡の一巻の長さは大体七〇センチ前後ぐらいが標準であつたものと思われる。この《編年記》は上下二欄に分れて書かれており、第一簡から第五十三簡まで先づ上欄を書き終つてから、もとに戻つて第一簡から簡五十三簡にむかつて下欄に書き綴られてゐる。ということとは、これは竹簡一枚一枚書いたものを後に一巻にしたのではなく、最初から一巻をなしたものに書き綴つていたということになる。また、この《編年記》では下欄末尾の欄が相当空白のままで残されている。これはこの卷子が以後書くべき量に合せて成巻されたものではなく、己に出来上つた卷子に書かれたということを物語つてゐる。この卷子の長さが当時の卷子のほぼ標準であらうと思われる理由である。《汲冢竹書記年》なども出土当時には同様の形態を有していたものであらうと想像される。

《編年記》は昭王元年から始皇三十年まで九十年について書かれており、上欄は昭王元年から五十三年まで、下欄は昭王五十四年から始皇三十年までである。一九七六年九月に、前に《発掘簡報》を作成した亦工亦農考古訓練班に替つて新たに組織されたのであらうと思われる睡虎地秦墓竹簡整理小組が編集し、文物出版社が出版した、線装七巻本帙入りに取られた竹簡写真図版を見ると、昭王元年から四十四年までは、その字体が極度な右上り、左上りを交えて比較的粗いのに対し、昭王四十五年以後は可成り均衡のとれた肉太の

字体であつて、両者の書き手、或いは書写時期の違いを感じさせる。また記述内容も四十四年までは簡単なもので、国家の所謂大事記的なもののみであるが、四十五年以後は若干の私的な記事も加わつて些が詳しいものとなっている。

釈文

《史記》に於ける同年の記事)

(1) 昭王元年  
○嚴君疾爲相。甘茂出之魏。

(2) 二年、攻皮氏。  
○庶長壯與大臣、諸侯、公子爲逆、皆誅。

(3) 三年  
○王冠。與楚王會黃棘、與楚上庸。

(4) 四年、攻封陵。  
○取蒲阪。

(5) 五年、歸蒲反。  
○魏王來朝應亭、復與魏蒲阪。

(6) 六年、攻新城。  
○蜀侯煇反、司馬錯定蜀。庶長奐伐楚、斬首二萬。涇陽君質於齊。

(7) 七年、新城陷。  
○拔新城。

(8) 八年、新城歸。  
○使將軍芊戎楚、取新市。齊使章子、魏使公孫喜、韓使暴鳶共攻楚方城、取唐昧。

(9) 九年、攻析。  
○孟嘗君薛文來相秦。奐攻楚、取八城、殺其將景快。

(10) 十年、  
○楚懷王入朝秦。秦留之薛文以金受免。樓緩爲丞相。

(11) 十一年  
○齊、韓、魏、趙、宋、中山五國共攻秦、至鹽氏而還、秦與韓、魏河北及封陵以和。

十二年

十三年、攻伊闕<sup>03</sup>。

十四年、伊闕<sup>04</sup>闕。

十五年、攻魏。

十六年、攻宛。

十七年、攻垣、枳。

十八年、攻蒲反。

十九年、

廿年、攻安邑。

廿一年、攻夏山。

廿二年、

廿三年

廿四年、攻林。

廿五年、攻茲氏。

廿六年、攻離名。

廿七年、攻鄧。

睡虎地秦墓竹簡文註解(一)

○向壽伐韓、取武始。左更白起攻新城。

○左更白起攻韓、魏於伊闕、斬首二十四萬、虜公孫喜、拔五城。

○大良造白起攻魏、取垣、復予之。攻楚、取宛。

○秦以垣爲蒲阪、皮氏。

○錯攻垣、河雍、決橋取之。

○王爲西帝、齊爲東帝、皆復去之。

○王之漢中、又之上郡、北河。

○錯攻魏河內。魏獻安邑秦出其人、募徙河東賜爵、赦罪人遷之。涇陽君封宛。

○蒙武伐齊。河東爲九縣。與楚王會宛。與趙王會中陽。

○尉斯離與三晉、燕伐齊、破之濟西。王與魏王會宜陽、與韓王會新城。

與楚王會鄆、又會穰。秦取魏安城、至大梁、燕、趙球之、秦軍去。

○拔趙二城。與韓王會新城、與魏王會新明邑。

○赦罪人遷之穰。侯毋復相。

錯攻楚。赦罪人遷之南陽。白起攻趙、取

廿八年、攻□。

廿九年、攻安陸。

卅年、攻□山。

卅一年、□。

卅二年、攻啓封。

卅三年、攻蔡、中陽。

卅四年、攻華陽。

卅五年

卅六年

卅七年、□寇剛。

卅八年、闕與。

卅九年、攻懷。

卅年

卅一年、攻邢丘。

卅二年、攻少曲。

代光狼城。

大良造白起攻楚、取鄆、鄧、赦罪人遷之。

○大良造白起攻楚、取鄆爲南郡、楚王走。周君來、王與楚王會襄陵。白起爲武安君。

○白起伐魏、取兩城。楚人反我江南。

○相穰侯攻魏、至大梁、破暴鳶、斬首四萬、鳶走、魏入三縣請和。

○客卿胡(傷)〔陽〕攻魏卷、蔡陽、長社、取之。擊芒卯華陽、破之、斬首十五萬。

○秦與魏韓上庸地爲一郡、南陽免臣遷居之。

○佐韓、魏、楚伐燕。初置南陽郡。

○客卿竈攻齊、取剛、壽、予穰侯。

○中更胡(傷)〔陽〕攻趙闕與、不能取。

○悼太子死魏、歸葬芷陽。

○夏、攻魏、取邢丘、懷。

○安國君爲太子。

阪南論集 人文・自然科学編 第二十三卷第四号

〔冊三年〕  
冊四年、攻大行、□攻 ○武安君白起攻韓、拔九城、斬首五萬。  
○攻韓南(郡)〔陽〕、取之。

元 年	二 年	三 年	四 年	五 年	六 年	七 年	八 年	九 年	十 年	十 一 年	十 二 年	十 三 年	十 四 年	十 五 年
元 年	二 年	三 年	四 年	五 年	六 年	七 年	八 年	九 年	十 年	十 一 年	十 二 年	十 三 年	十 四 年	十 五 年

十 六 年	十 七 年	十 八 年	十 九 年	二 十 年	二 十 一 年	二 十 二 年	二 十 三 年	二 十 四 年	二 十 五 年	二 十 六 年	二 十 七 年	二 十 八 年	二 十 九 年	三 十 年
十 六 年	十 七 年	十 八 年	十 九 年	二 十 年	二 十 一 年	二 十 二 年	二 十 三 年	二 十 四 年	二 十 五 年	二 十 六 年	二 十 七 年	二 十 八 年	二 十 九 年	三 十 年



睡虎地秦墓竹簡釈文註解(一)

三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----

注 解

(1) 昭王は、《史記、秦本紀》では昭襄王に作っている。《韓非子》などでは例えば《外儲說右下第三十五、說二》で「秦昭王有病、百姓里買牛而家爲王禱」としたり、「一日、秦昭襄王病、百姓爲之禱。」ともし両方用いている。また《史記、六國年表》では昭王を使っている。後の莊襄王や、楚の頃襄王の場合も同様な事が言える。裏字に何等かの特別な意味があったのかもしれない。元年の元字は漢代の隸書では其に当る字に酷似している。しかしこの雲夢竹簡では其字はすべて其字のままに使われており未だ漢隸には到っていないということが解る。

(2) 皮氏については、《六國年表》秦昭王元年の魏の項に、「秦擊皮氏、未拔而解。」とあるから魏地であろう。皮氏そのものについてあまり詳らかではないが、《史記》の《正義》に、「皮氏故城在絳州龍門縣西一里八十步」とあるから現在の龍門のあたりであらう。

(3) 三年について何等記述がない。この《編年記》は昭王元年から最後の今三十年まで、年次は欠けることなく記されている。中に数条、記載の欠けているように見えるものもあるが、それ等は簡上では空欄となつて残してある所からみて、筆者は記入したが何等かの理由によってその部分の文字だけが、悠久の年月の間に消失し去つたものと思われる。故に、《編年記》は最初から最後まで

での年次が先づ全て記されてから、その後で各条の下に各々の大事が記されていたものと思われる。《春秋》経文の各年次に続く記載に、時に季節、月次のみ記され、記事そのものが記されていないものがあるのは、やはりこの《編年記》と同様の成立情況を示しているのかもしれない。

- (4) 《史記》六國年表 秦昭王四年の魏哀王十六年の項に「秦拔我蒲坂、晉陽、封陵」とあるから、封陵は魏地である。また《秦本紀》昭襄王十一年に前掲の如く、「秦與韓、魏河北及封陵以和」とあり、《正義》に「封陵在古蒲阪縣西南河曲之中。」とある。《水經注》には風陵に作る。

- (5) 《本紀》《史記》秦本紀を略称す 四年に、「取蒲阪」とあり、五年の条に、「復興魏蒲阪」とある。また《六國表》の秦昭王五年の魏の条には、「與秦會臨晉、復〔歸〕我蒲坂」とある。故にこの簡文の「歸」は「復興」の意味であることが解る。四年に秦が取ったものを五年に再び魏に返してやったということであろう。蒲反は、蒲阪、蒲坂で本来魏地である。《史記》《正義》に、「《括地志》云、蒲阪故城在蒲州河東縣南二里、即堯舜所都也」とある。蒲州は現在の山西省南西の端、永済の西にある。

- (6) 《本紀》 昭襄王六年に、「庶長奐伐楚」とあり、七年に、「拔新城」とある。《正義》に「《括地志》云、許州襄城縣既古新城縣也。按世家、年表、則新字誤作襄字。」とする。新を襄と誤まる根拠は明示し難いがその可能性は大いにあると言える。この《編年記》は同時資料とはば認められるのに対して、《史記》は二百年程は

降るからである。また《楚世家》に「懷王二十九年、秦復伐楚、大破楚軍、楚軍死二萬、殺我將軍景歃。」といい、《年表》の昭王七年の楚の条に「秦取我襄城、殺景歃」とあるを合せ考えればやはり襄城は新城のことでなければなるまいと思われる。即ち新城は楚地であって、現在の許昌の南西にある襄城であろう。

- (7) 前掲《本紀》の、「拔新城」と一致する。同じく前掲《年表》の「秦取我襄城」とも一致する。

- (8) 歸字は写真図版で、帚の部分のはっきりしない。しかし五年の条の歸字とくらべると全体的には類似しているので恐らく間違はなく歸字であろう。ただその字の用法として、五年の「歸蒲反」と、「新城歸」とは意味的に何如に異ってくるか判然としない。

- (9) 《本紀》は、「奐攻楚、取八城、殺其將景快」とあり、《年表》の楚の条には「秦取我十六城」とあるから析も楚地であり、八城か或いは十六城のうちの一つである。尤も景快は《年表》昭王七年、楚の、「殺景歃」に当るのであろう。析は整理小組《睡虎地秦墓竹簡》一九七八年十一月刊によれば、現在の河南省西峡のあたりという。

- (10) 《本紀》《年表》ともに戦争の記事はない。

- (11) 《本紀》に、「齊、韓、魏、趙、宋、中山五國共攻秦。」とあるが、「至鹽氏而還」とあるから《編年記》には記載しなかったものか。ただ《年表》には、「復興魏封陵」とあり、《本紀》の、「秦與韓、魏河北及封陵以和」と一致する。

- (12) 《年表》 魏の条に、「秦尉錯來擊我襄」とあるが、この襄は、前

の裏城ではなく魏地である。

(13) 〈本紀〉に、「左更白起攻新城」とあり、〈白起列傳〉に、「白起爲左庶長、將而擊韓之新城。」とある。〈正義〉に、「括地志云、洛州伊闕縣本是漢新城縣、隨文帝改爲伊闕、左洛州南七十里」とあるから、六年の条に見える許州裏城の新城とは異なる。即ち河南省洛州伊川の近くである。白起の新城（伊闕）攻めのことは〈本紀〉〈年表〉十四年の条に見える。闕字にこの〈編年記〉では闕字を用いている。闕と闕との通用については後に述べるつもりである。

(14) この条は、伊闕という地名が一つ記されているのみで、その記された意味が判然としない。写真図版を見る限り、下に何等かの記述があったような形跡もみられない。〈本紀〉は、「左更白起攻韓、魏於伊闕」と記し、〈年表〉には、「白起擊伊」とあり、魏の項にも、「佐韓擊秦、秦敗我兵伊闕」とある。また韓の項にも、「秦敗我伊闕」とある。〈正義〉に、「括地志云、伊闕在洛州南十九里。水經注云、昔大禹疏龍門以通水、兩山相對、望之若闕、伊水歷其間、故謂之伊闕、按、今洛南猶謂之龍門也。」とあるから、伊闕というのは本来、二つの峰が大きく並び立つ城門のような山に付けられた名であったようである。

(15) 〈本紀〉に、「白起攻魏、取垣、復予之。」とあり、〈正義〉は、「垣音袁、前条取蒲阪、復以蒲阪與魏、魏以爲垣、今又取魏垣、復與之、後秦以爲蒲阪皮氏。」とある。蒲阪、垣、皮氏はほぼ同じ地を指しているようであるが、〈編年記〉は秦の側から書かれ

睡虎地秦墓竹簡文註解(一)

たものであるが、その中で、垣と呼び、蒲阪、皮氏を呼んでいるのは、それ等が全く同じ地を指したものでないからではないだろうか。

(16) 〈本紀〉十五年に、「攻楚、取宛」とあるのがこれに当るのである。〈年表〉韓の条に、「秦拔我宛城」とあるから、宛は韓地である。〈韓世家〉釐王五年に、「秦拔我宛」とある。〈年表〉にも同じ釐王五年は秦昭襄王十六年に当る。その〈正義〉に、「宛、鄧州縣也、時屬韓也。」とある。《戰國策》楚懷王二十八年（秦昭王六年）に、「齊、韓、魏攻楚五年、取宛葉以北。」とあって、宛はもと楚の地であったことが解る。

(17) 〈本紀〉十五年に、「白起攻魏、取垣、復予之」とあるから、〈編年記〉によれば、秦はまたもや、魏に返還した垣を攻めたということになる。或いは〈本紀〉十五年のこの記事が〈編年記〉十七年の「攻垣」に当るのであるうか。それとも〈本紀〉十七年に、「秦以垣爲蒲阪、皮氏」とあるのが、「攻垣」に当るのかもしれない。しかし〈本紀〉は十八年にまた「錯攻垣」と記す。

〈本紀〉十六年に、「在更錯取軹及鄧」とあり、〈編年記〉の「軹」は恐らくこの「軹」であろう。《史記・集解》に、「地理志河內有軹縣、南陽有鄧縣。」とあり、〈正義〉に「括地志云、故鄧城在懷州濟源縣東南十三里、故鄧城在懷州河陽縣西三十一里、並六國時魏邑也、按、二城相連、故云及也。」とする。軹は魏地である。〈年表〉秦昭王十八年に、「客卿錯擊魏、至軹、取城大小六十一」とあるのがこれであろう。

一一

(18) 蒲反は、《本紀》十七年に、「秦以垣爲蒲阪、皮氏。」とあるから、「攻蒲反」は、《本紀》十八年の、「錯攻垣」と同事を述べたものである。《年表》も魏昭王七年（秦昭王十八年）に、「秦撃我。取城大小六十一。」と述べそれを裏づけている。これについて《正義》は、「蓋蒲阪、皮氏又歸魏、魏復以爲垣、今重攻取之也。」としている。

(19) 《本紀》には、「齊破宋、《年表》趙に、「秦拔我桂陽」とある以外ともに目だつ記事はない。

(20) 安邑については、《本紀》二十一年に、「錯攻魏河内。魏獻安邑」とある。《年表》には、「魏納安邑及河内。」とある。よって安邑は魏地である。《本紀》の記事は、《編年記》に基けば、やはり秦に前年から攻められていたからということになり、この記事は《史記》を補う史料となっている。

(21) 夏山については《年表》韓の条に、「秦敗我兵夏山。」とある。よって夏山は韓地である。

(22) 《本紀》《年表》とも、「蒙武伐齊」の事以外拔伐の記事はない。

(23) この年は秦が、韓、魏、燕、趙と協同して齊を撃った。《編年記》には記されていないのは秦自身の係わりがそう大きくなかった爲であろうと思われる。《本紀》も大きくは扱っていない。

(24) 《本紀》はこの年、「秦取魏安城、至大梁、燕、趙救之、秦軍去。」と記す、「攻林」とは恐らくこの時の戦いの一部であったであろう。林は魏地であろう。因みに安城は、《正義》に、「地理志汝南有安城縣。」とし、《集解》には、「括地志云、安城在豫州汝

陽縣東南十七里」とする。

(25) 茲氏について《本紀》《年表》ともに触れる所がない。《本紀》は、拔趙二城」と記するのみであるから、茲氏は趙の地であり、ここに言う二城のうちの一つであろう。

(26) 《史記、周本紀》赧王三十四年（秦昭王二十六年）に蘇厲が周君に謂った言葉に、「秦破韓、魏、扑師武、北取趙蘭、離石者、皆白起也。」とある。その《集解》には、「地理志曰西河郡有蘭、離石二縣。」とあり、《正義》に、「括地志云、離石縣、今石川所理縣也。蘭近離石、皆趙二邑。」とある。離石は趙地である。《年表》趙の項に、「秦拔我石城」とあるのは恐らくこの離石であろう。

(27) 《本紀》では二十八年に、「白起攻楚、取鄢郢」とする。《正義》には、「鄢郢二城並在襄州。」とある。楚地である。

(28) 写真図版では、「二十八年」の下に更に二文字分の残消の形跡があるが、整理小組の「睡虎地秦墓竹簡」は、上の一字を他から推して攻と読んだのであろう。

(29) 安陸は現在湖北省にある安陸で、この竹簡の出土地である雲夢、孝感の近隣である。《本紀》は、「白起攻楚、取郢爲南郡。」とある。《年表》には、「白起撃楚、拔郢、更東至竟陵、以爲南郡。」とあるから、楚軍は郢へ至る途中で安陸を改めたのであろう。また《年表》楚の項に、「秦拔我郢、燒夷陵、王亡走陳。」とある。南郡は現在の江陵のすぐ北のあたり、夷陵は現在の宜昌市のあたりである。

(30) 写真図版では攻字の下二字乃至三字がはっきりしない。整理小組の単行本では二字目を山とするがそれもはっきりしない。《本紀》は、「蜀守若伐楚、取巫郡、及江南爲黔中郡。」と記し、《年表》の楚の項には、「秦拔我巫、黔中。」とある。《正義》によれば、「括地志云、巫郡在夔州東百里。」と、また、「黔中故城在辰州沅陵縣西二十里。江南、今黔府亦其地也。」とある。沅陵は、現在の長沙市西百四十キロぐらゐにあり、辰州というのは現在の辰陽あたりであろうから、この三十年の攻は、二十九年の、「攻安陸」「拔郢」の延長として行われた南征であつたのであろう。

(31) 年次の下に少くとも一字分の痕跡が見られるが、一字というのは用をなしないであろうから以下は消失してしまつたのであるう。

(32) 啓封、は現在の河南省開封県、前漢文帝の諱を避けて開封に改めたという。魏地である。

(33) 《本紀》に、「客卿胡傷攻魏卷、蔡陽、長社、取之。」とある。

しかし《年表》の魏の項には、「秦拔我四城。」とあり、《本紀》が三城を数えるのと一致しない。《正義》に、「括地志云、蔡陽、今豫州上蔡水之場、古城在豫州北七十里。長社故城在許州長社縣西一里。皆魏邑也。」とある。「蔡陽」が「上蔡水之陽(川の北側)」ということもあろうが、整理小組が言う如く、「蔡、中陽」の誤りであるかもしれない。中陽は前に出て来た離石のすぐ南、茲氏の西五十キロにある。

(34) 華陽は《本紀》三十三年に、「(胡傷)擊芒卯華陽、破之。」と

睡虎地秦墓竹簡文註解(一)

ある。《集解》に、「司馬彪曰、華陽、亭名、在密縣。」とあり、

《正義》に、「括地志云、故華城在鄭州管城縣南三十里。國語云史伯對鄭桓公、號、鄆十邑、華其一也。華陽卽此城也。按、是時韓、趙聚兵於華陽攻秦、卽此矣。」とする。韓地である。

(35) 年次の記載以下文字の痕跡見えず。

(36) 年次の記載以下空白で文字の痕跡見えず。

(37) 《本紀》にはこの年の記載が無い。《本紀》三十六年に、「客卿竈攻齊、取剛、壽」とある。簡文の三十七年の記事はこれを指すか。寇は《說文》に、「暴也。」とある。段注に、「暴當是本部之暴、暴疾之字、引伸爲暴亂也」とある。強奪の意味になるが、ここでは《本紀》が「取」と言っているから意味上はそれでよいが、

《編年紀》は少くとも秦に対して悪くは言わない立場であるから少し不可解である。□に他国名が来ること、今までの記述例からは考えられない。剛は《正義》に、「括地志云、故剛城在兗州龔丘縣界。」とある。

(38) 《本紀》に、「胡傷改趙閼與、不能取。」とある。閼與について《集解》は、「孟康曰、音焉與、邑名、在上黨涅縣西。」とし、《正義》は、「閼、於達反。與音預。閼與聚城一名烏蘇城、在潞州銅鞮縣西北二十里、趙奢破秦軍處。又儀州和順縣卽古閼與城、亦云趙奢破秦軍處。然儀州與潞州相近、二所未詳。又閼與山在洛州武安縣西南五十里、趙奢拒秦軍於閼與、卽山北也。按、閼與山在武安故城西南、又近武安故城、蓋儀州是所封故地。」とある。《年表》では秦昭王三十七年、韓の項に、「秦擊我閼與城、不拔。」とする。

一三

写真図版ではこの条は全体にはつきりせず、殆んど解読不可能の如きである。整理小組は恐らく原簡か、もっと鮮明な写真によって判読したのであろうか。

(39) 〈本紀〉にはこの条の記載がない。〈年表〉には魏の項に、「秦拔我懷城。」とだけあり、〈編年記〉の、「攻懷」と一致する。

(40) 四十は冊で表わされている。

(41) 〈本紀〉に、「夏、攻魏、取邢丘、懷。」とある。〈集解〉に、  
 〈徐廣曰、邢丘在平皋。駟案、韓詩外傳武王伐紂、至于邢丘、勒丘於寧、更名邢丘曰懷、寧曰修武。〉とある。また〈正義〉には、  
 「括地志云、平皋故城本邢丘邑、漢置平皋縣、左懷川武德縣東二十里。故懷城、周之懷邑、在懷州武陟縣西十一里。」とある。〈年表〉魏の項に、「秦拔我廩丘。」とあり、その〈集解〉に、「徐廣曰、或作邢丘」とするから邢丘はもとより魏地である。

(42) 少曲について記載は〈本紀〉〈年表〉にない。

(43) この簡は年次の記載すら無い。写真図版を見る限り一切文字の形跡がない。〈本紀〉には、「白起攻韓、拔九城」事があげられているが、〈年表〉韓には、「秦拔我陘。城汾旁。」とあるのみでこれも又他一切の記述はない。

(44) 太行は、現在の太行山区を指すのであろう。〈本紀〉に、「攻韓南陽」とあるからこれも韓地であることは確かであろう。

(以下次稿)

以上 〈編年記〉の初、昭王元年から四十四年までの大事記を、  
 〈史記〉の〈秦本紀〉、〈六國年表〉に随って注釈を加えてみた。この

睡虎地第十一号秦墓の恐らく墓王と考えられる喜は、昭王四十五年に生れている。喜かたどった事跡を交えながら次稿で昭王四十五年以下を注釈していきたい。

(昭和六十三年一月二十七日受理)